



富士駅前～長沢間馬車鉄道開通祝賀パレード（1909年）

近現代



昭和初期の富士駅前

産業都市の礎がつけられた 明治～大正期

明治期に入ると宿駅制度が廃止され、失業者が増大した。そこで殖産興業を目的に、野村一郎、内田平四郎らが内山地区の開墾を手がけ、三椏^{みつまた}や茶、桑などの栽培が盛んに行われるようになった。これを機に製紙産業が芽生えることになる。

1879年、栢森貞助は富士市で初めて鈎玄社^{こうげん}という手すき和紙の工場を設立するが、わずか1年で閉鎖となった。

1890年に富士製紙第一工場が誘致されたのを皮切りに、富士市の豊富な自然湧水^{ゆづい}を利用し、機械製紙が一気に広まった。

大正、昭和期に入っても企業の進出は衰えることを知らず、現在の東芝や興人、日産自動車など



開設直後の富士製紙第一工場（1890年）

の大企業も相次いで操業を開始した。

産業が栄えると、交通網も整い始めた。1890年に富士馬車鉄道が鈴川～大宮（現・富士宮）間に

開通、1913年には富士身延鉄道（現在の身延線）が開通した。さらに1924年、国道1号の富士川鉄橋が完成し、開通式が大々的に行われた。

日清日露戦争の快進撃に伴い、国全体に戦時色が濃くなっていった。日本は第一次世界大戦でも勝利をおさめたものの、第二次世界大戦では苦戦を強いられ、主要工場は軍需工場に転換させられた。富士市では軍需工場を中心に空襲の被害に遭ったものの、大々的な空襲は免れ、やがて終戦を迎えた。



河合橋を走るバス(1933年)

産業都市として発展

富士市は戦後、急ピッチで産業都市へと変貌を果たした。^{へんぼう}

相次ぐ企業参入とともに、鉄道や道路が増強された。1948年に岳南鉄道が開通し、1969年に東名高速道路が開通するまで、産業用輸送の足として大活躍した。1961年に田子の浦港が開設され、1964年に重要港湾、1966年には関税法による開港の指定を受け、国際港としての地歩を固めた。

富士市は1957年に東駿河湾臨海工業地帯として国の重要工業地帯に指定され、製紙業のほかにも、自動車、食品など多様な産業が参入し発展した。



本市場付近の旧国道(1964年)

富士市誕生

1966年、吉原市、富士市、鷹岡町の2市1町が合併し、現在の富士市が誕生した。産業が発展するにつれ大気汚染とヘドロによる水濁汚染などの公害問題にも直面したが、行政と業界との連携により克服した。

富士市は1993年に静岡県東部地方拠点都市地域の指定を受けた。さらに2001年4月からは特例市に指定され、豊かな自然資源と産業を融合させた新たな都市づくりを目指している。

